



第4章

# 宮城県の写真史

大正～昭和前期の動向

三上 満良

( 前宮城県美術館副館長 )

## はじめに

これまで宮城県の総合的な写真史研究は殆ど行われておらず、私の報告も既刊の文献類をなぞった付け焼き刃のような内容であることを初めにお断りしておく。

昭和期までの地域史をまとめた『宮城縣誌』や『仙台市史』をはじめとする各市町村史が刊行されているが、近代の文化史、文化活動史の項に、写真をめぐる動向が記述されている例は稀である。明治時代以降に全国に広がった写真は、写真館という店舗をもつ生業としての民間技能であり、また記念や記録、報道、印刷、広告といった業務を担う一職能であった。そして明治後期になると、高価ではあったがカメラや写真材料が市販され、富裕層の新しい「高級趣味」としての写真も広がる。これらは「アマチュア（素人）写真家」という呼称に象徴されるように好事家たちの本業を離れた道楽とみなされ、伝統的な芸事を扱う文化史や芸術評論の対象の外に置かれてきたのは、本県に限ったことではないだろう。「芸術写真」は芸術と認知されてこなかったのである。

余談だが、文化庁所管の日本芸術院を構成する部門枠に写真はないので、写真家は芸術院会員にはない。戦前の文部省展覧会（文展）、帝国美術展覧会（帝展）の流れを汲む現在の日展（一九五八年社団法人として創立）も、定款に「総合美術展覧会」という言葉を掲げるものの未だに写真部門は無い。こうした中央画壇の組織に做ったかたちで、本県でも一九六四年に宮城県芸術協会（現公益社団法人）が結成された。創立時からあった絵画、彫刻、工芸、書道などの部門に写真部が加わったのは、三〇年近く後の一九九三年である。

さて、郷土の写真史を辿れる出版物は、一九八八年に宮城県写真師会連合会が発行した『宮城県写真

一〇〇年史』のみである。これは県内各地の営業写真館の歴史を回顧したものだが、写真館主が関わった写真グループなどへの言及はなく、アマチュア写真史を調べる手がかりは見出せない。

アマチュア写真家は、活動が短期で終わったり、本業の事情で過去を封印したりする例も少なくない。地域写真史の調査が遅れた結果、せっかく震災は免れたものの、家屋の建替、代替わり、引越し、そして東日本大震災のような自然災害によって多くの写真作品や関連資料が失われてしまったことは、地域の美術を扱う学芸員の職にあつた者として反省しなければならぬだろう。

前置きが長くなってしまったが、以下は、昭和前期までに発行された写真雑誌などの記事や、近年の研究によつて明らかになつた写真史に関わる断片的な情報を拾い集めて紹介する宮城県写真史調査の間報告である。

### 1 先駆者たち

大正から昭和前期を顧みるのにあたり、それ以前の宮城県の写真史を概観しておこう。本県の写真の開祖とされるのは遠藤陸郎（一八四五—一九一四）である。仙台藩が幕末に結成した洋式銃隊に属していた陸郎は、戊辰戦争時に藩を出て函館戦争に参戦したのち仙台に戻り、弟の寛哉と一八七六年に大町に写真館を開業した<sup>1</sup>。函館で写真を学んだと思われるが確証はない。七八年に立町通に移転。八三年に「早撮り」で有名な東京の江崎礼二が来仙した折に助手をつとめ、自らも「早撮写真師」という技術力を広告に掲げ、スタジオでの肖像撮影にとどまらず、記録、報道的な撮影も手がけるようになる。江崎との出会いを機に、もう一人の弟の誠を江崎の下に修業に出し、その後アメリカに留学させた。誠は、

最新の写真の技術や写真館の経営術を学んで仙台に帰り、遠藤写真館をアメリカナイズさせて評判を高めたという。

陸郎は一八八五年に仙台藩に秘蔵されてきた支倉常長関係資料（現国宝・ユネスコ記憶遺産登録）を撮影している。また、八八年には磐梯山の噴火を知って会津に赴き、被災現場を撮り歩いて即座に報道写真集を頒布するなど営業の幅を広げた。その業績によって人脈が広がり、九一年には宮内省の千鳥探検に同行し、記録写真を献上した。日清戦争時には仙台の陸軍第二師団に従軍写真師として同行し、九四年に『戦勝国一大記念帖』を刊行している。

明治一〇―二〇年代、三兄弟が営む遠藤写真館は当地を代表する写真館となった。しかし、一九〇二年に仙台の店を閉めて、弟たちと台湾に移住し、台南市に写真館を開く。一九一四年に陸郎が歿した後、弟たちが写真館の営業を続けた。一九二〇年ころから、砂糖商・安部幸商店の台南支店に赴任していた木村伊兵衛が、この遠藤写真館に通って写真の基礎技術を学んでいたことが知られている。遠藤陸郎は、宮城県における写真の開祖であるばかりでなく、フォト・ジャーナリストの草分けであり、その弟たちは、のちに写真界の巨匠となる木村の師でもあった。

遠藤陸郎と同世代で、仙台藩士から写真師として名を成した佐久間範造（半真・一八四四―一九七）の名も先駆者としてあげておこう。佐久間は涌谷町の生まれで、旧姓は宍戸。陸郎と同じく戊辰戦争の折に函館の戦いに加わった。維新後も北海道に残って写真を学び、一八八一年頃に小樽に写真館を開業している。開拓使の依頼で撮影した鉄道敷設工事の写真は、撮影者が判る記録写真の秀作として早くから評価されてきた。

仙台に話を戻すと、遠藤写真館が大町に開業した翌年の一八七七年には松尾官（寛）亮が常盤町に、高桑義盛が公園前に開業している。その後、東京浅草の北庭筑波が仙台に進出して弟子に営業させ、遠藤写真館が立町通本店の他に二支店を開設するなど競争が激化していった中で、明治中期以降の仙台の写真業者を牽引するのが、一八八八年に東一番町に開業した酒田出身の白崎民治（一八五七―？）である。一〇年ほど早く開業した遠藤写真館と並んで、官庁や第二師団、東北帝大をはじめとする学校などの公式撮影も受注していた。また白崎は、幻燈機を購入して一八九六年に仙台南町の仙台座で幻燈会を催し、翌九七年には同じ仙台座において活動写真を上映しており、神戸、京都、大阪、東京に次ぐ地方における最初期の映画興業主としても知られる<sup>3</sup>。

白崎写真館には弟子たちが集まり、門下の写真師が県の内外で開業していった。その中の出世頭が、天童出身の大武丈夫（一八七八―一九三〇）である。一九〇一年に独立して師匠の白崎写真館の斜め向かいに写真館を開業した大武は、最新の機材を導入して評判を高めた。宮内省、陸軍御用写真師にも認定され、一九〇八年には当時皇太子だった大正天皇の松島行啓に同行して『東宮殿下行啓記念写真帖』を刊行。翌年には、上京して日比谷に洋式三階建の写真館を開業し、首都の政財界の顧客を集めた。当時貴族院議員で日銀副総裁だった高橋是清（養父は仙台藩士）を撮った写真が同年のドイツ国際写真コンテストで最高賞を得ている。山形県出身で仙台に写場を開いた白崎民治と大武丈夫は、『写真新報』一六一号（一九二二年二月）の「本邦写真家列伝13」に掲載されるなど全国に知られる写真家となった。

『宮城県写真一〇〇年史』によれば、明治末、一九一〇年の仙台の写真館は一一館であった。一九〇八年には、ドイツ領だった中国の青島で写真を学んできた阿部福也が元寺小路に写真館を開業し、

現在も子孫が阿部写真館として国分町で営業している。東京日比谷の大武写真館はその後火災で焼失するが、仙台に戻り大武写真館の看板を門弟の小関昌輔が引き継いで今日にいたる。小関は戦後に「大武写真サークル」を主宰し、またカメラや写真感材を扱う小関商店（現株式会社コセキ）も設立した。白崎写真館は息子の民輔が継いだが、のちに廃業して現在はない。大正から昭和の時代に宮城県内で創業した写真館の多くは、白崎、大武、阿部の系譜に連なっているようである。

## 2 大正く昭和前期のアマチュア写真家たち

カメラや写真感剤の大衆化、撮影や現像、引伸しなどの技法解説書の刊行、そして写真雑誌の興隆とともに、宮城県においても、明治末から昭和初期にかけて県内各地で、作品としての写真を研鑽するアマチュア写真団体が結成されている。日本写真協会編『日本写真史年表』（講談社、一九七六年）には、一九〇四年に伊達宗充らが登米写友会を結成との記載がある。伊達宗充は登米伊達家の一四代を継いだ寧裕の兄基寧の子息で、のちに白石姓となった人物。同名の一代当主とは別人である。現当主の伊達宗弘氏（仙台大学客員教授・元宮城県図書館長）によれば、早くに登米町を離れたので宗充に関する資料は残っていないという<sup>4</sup>。

登米写友会に三年遅れて一九〇七年に、前述した白崎民治と大武丈夫が中心となって仙台写友会を結成している。写友会という名称から、二人のプロがリーダーとなってアマチュアを組織したグループであることがうかがえるが、詳細は不明である。

その後、大正期の県内では、『古川市史（下）』（一九七二年刊）掲載年表によれば、一九一八年にコ

スモス倶楽部（古川）が、前掲『日本写真史年表』によれば、一九一九年に仙台写真倶楽部、二二年に仙台写真協会、二三年に趣光会（気仙沼）が結成されている。

『日本写真年鑑大正一四―一五年』（朝日新聞社、一九二六年）の全国写真団体名簿には、仙台写真会（会員三五名／代表〃田中文治郎／事務所〃仙台市大町五丁目櫻井方）、石巻写真倶楽部（会員六二名／代表〃毛利総一郎／事務所〃石巻橋横町みどりや文具）、石陽写真同好会（会員一〇名／代表〃月野二郎／事務所〃石巻町坂下町千葉写真館）の三団体が掲載されている。

同同年発行の『アルス写真年鑑一九二六年版』（アルス、一九二六年）の全国写真団体一覧には、白光会（事務所〃刈田郡白石町中町一八 関谷薬店／代表者、会員数など記載なし）、淡光写真会（事務所〃仙台市柳町一〇番地 スズキ薬局写真材料部／代表者、会員数など記載なし）、新興写真会（会員数二八名／代表〃千葉仙／事務所〃仙台市大町五丁目 櫻井光栄堂内／創立〃一九二五年三月／活動〃年二回展覧会開催）、仙台写真同人会（事務所〃仙台市南町四三 木村文化堂内／代表者・会員数など記載なし）、趣光会（会員二〇名／代表〃新沼綱五郎／事務所〃本吉郡気仙沼南町六四 梁川常三郎方／創立〃一九二二年三月／活動〃展覧会、撮影会開催）の五団体が掲載されている。

前記二冊の年鑑の六年後に発行された『日本写真年鑑昭和六―七年』（朝日新聞社、一九三二年）の全関東写真団体名簿には、県内グループとして、仙台写真倶楽部（会員四八名／代表〃槇傳次郎／連絡先〃仙台市大町五丁目 櫻井方）、仙台写真研究会（会員一八名／代表〃佐々木清義／連絡先〃仙台市大町五丁目 櫻井晃栄堂内）、仙台写真師同好会（会員二二名／連絡先〃仙台市東一番町 白崎方）、仙台写真同好会（会員六名／代表〃半沢正二郎、田中文二郎／連絡先〃仙台市東二番町六九）、仙台写真同人

会（会員一〇名／代表Ⅱ木村政義／連絡先Ⅱ仙台市南町木村文化堂内）、陽石（筆者註・石陽の誤記か）写真同好会（会員四二名／代表Ⅱ毛利総一郎／連絡先Ⅱ石巻町橋横みどりや文具内）、仙南写真研究会（会員五名／代表Ⅱ横山忠蔵、伊藤博／連絡先Ⅱ亘理町中野二五横山方）の七団体が掲載されている。

前記した年鑑には未掲載だが、『日本写真史年表』の昭和期の頁には、一九三〇年一〇月に古川光画倶楽部、三八年七月に七光会（登米市佐沼）結成の記事が載る。

大正から昭和戦前期の写真同好会は、所属会員数が、数名から六〇名をこえる団体まで規模は多彩であり、写真機材・材料を商う商店や写真館が連絡先となっていた。仙台の複数の団体の事務所となっていた櫻井晃栄堂は写真材料商で、写真帖等の印刷出版業も営んでいた。主人の櫻井常吉は、一九一二年七月に仙台初の洋風喫茶店カフェ・クレーンを開業した人物としても知られる。ここがこの時代の仙台の写真文化の拠点となっていたことは確かだろう。木村政義が経営する写真機・写真材料店の木村文化堂（現キムラ文化堂）ももうひとつの拠点だったことがうかがえる。

各地のアマチュア写真グループの活動は、撮影会や写真展の開催もあるが、大正一〇年頃から相次いで創刊された写真雑誌の月例コンテストをめざす研鑽会が主だった。会員の集まりは、写真表現論や機材や現像、引伸し、印画技術に関する情報交換の場であっただろう。各グループには、秀でた能力のリーダーがいたはずである。前記の団体名簿に記載されているグループの代表者で、大正から昭和初期の『芸術写真』（芸術写真社）、『カメラ』（アルス）、『写真芸術』（東新書店出版部、写真芸術社）、『芸術写真研究』（アルス、光大社）、『アサヒカメラ』（朝日新聞社）といった雑誌に名を見出せるのは、田中文二郎と千葉仙である。



仙台写真会の田中文治郎は、仙台写真同好会の田中文二郎と同一人物であろう。田中は、『カメラ』や『ア  
ルス写真年鑑』などに作品が掲載されているのだが、人物の詳細は不明である。

新興写真会の上級者向け雑誌『写真芸術』の「写真芸術展覧会」から頭角をあらわしたアマチュ  
ア写真家である。関東大震災の後、

一九二三年に『写真芸術』が廃刊と  
なると、アルスの『芸術写真研究』

主筆の中嶋謙吉の知遇を得て、人  
物、風景、静物を被写体とした絵  
画的な写真を発表してゆく【図1】。

千葉の作品は高く評価され、中嶋  
が企画したアルス芸術写真画集シ  
リーズの一卷として個人作品集の  
刊行が予定されていた。このアル  
ス芸術写真画集は一九二六年に第  
一編『高山正隆写真画集』、第二編  
『西山清写真画集』が発行されたが、  
既刊書の巻末に近刊として告知さ

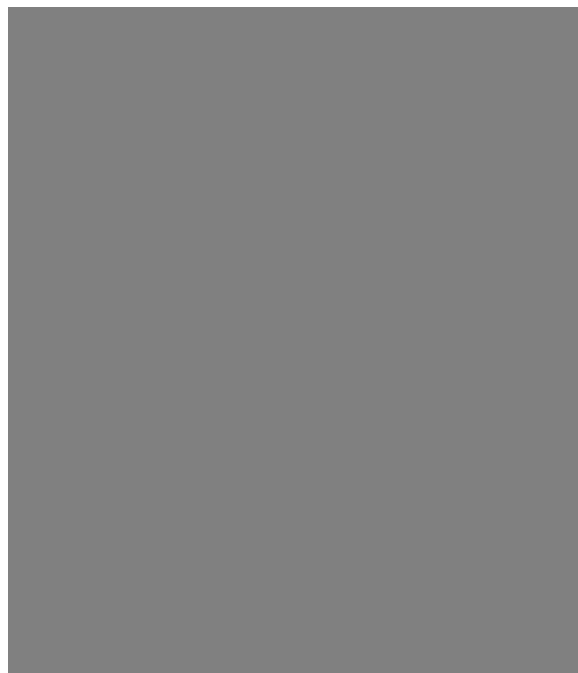


図1 千葉仙《習作》『芸術写真研究』  
1924年1月

れていた【図2】福原信三、千葉仙淵上白陽、高田皆義の巻は未刊に終わった。また千葉は、隣県の福島で一九二三年に結成された二葉会の中心メンバーである佐藤信、本田仙花らと親交を結び、「自由で、生々しい」千葉の作風が佐藤たちに大きな影響を与えたという。様式化された印画技巧に走りがちなこの時期のピクトリアリズム写真にあって、木炭デッサンのような重厚な階調と大胆な構図で被写体の存在感を表現した千葉の写真は、所属グループ名の「新興」の香りがする造形性を持っており、他のアマチュアとは一線を画しているように思える。福原信三らと肩を並べる大正から昭和前期の芸術写真に名を残す写真家だが、いまのところ、当時、仙台市外記丁に住んでいたということしか判っておらず、印刷図版でしか作品を鑑賞できない。

昭和一〇年代になるとカメラ人口も急増し、新聞社が取材要員として各地のアマチュアを組織化していった。『アサヒカメラ』一九三八年二月号に「東北地方写真座談会」という記事がある。出席者は、

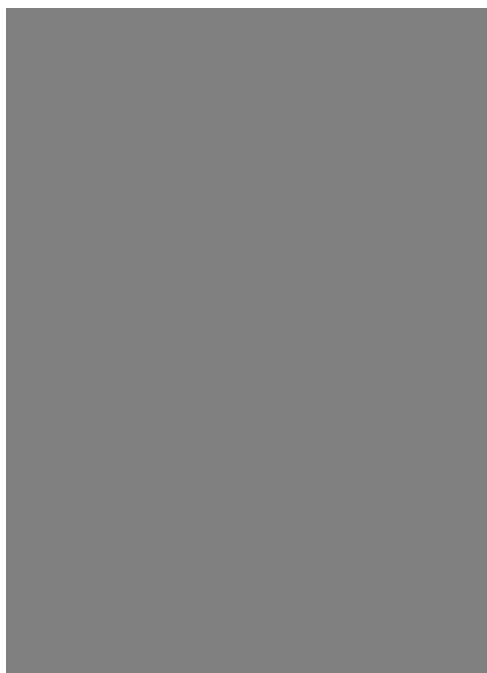


図2 アルス芸術写真画集刊行案内  
『高山正隆写真画集』1925年 巻末広告

唐武（盛岡写真連盟会長）、岩淵友義（古川光画倶楽部）、椎名長吉（仙台簡易保険支局）、安富保蔵（千代田生命仙台支部長）、戸井堯（長町駅）、星亀撤（東北帝大医学部）、毛利秋俊（朝日新聞仙台支局長）、松野志氣雄（アサヒカメラ編集部）の八名（肩書、所属は掲載時のもの）。仙台で開かれたものと思われる朝日新聞関係者と盛岡の唐武を除いた五名の出席者は、宮城県在住者で占められている。岩淵、椎名はこの時期の同誌月例コンテストの常連入選者である。

座談会では、冬の風景、風俗、温泉といった地域の撮影ガイドから、フィルター、光線、雪の写し方といった技術情報まで読者の参考になる話が交わされている。最後に、編集部から写真の傾向について聞かれ、「一時流行りました新興写真なんか、吾々から見るとどういふ意味でつくっているのか全然判りません」（安富）、「仙台の方とは別ですが、私の方（註・古川）は片田舎なものですから、尚更にさういふ時代の風潮に乗ると云うことは殆ど不可能です」（岩淵）、「人為的にも自然的にも変化の乏しい東北地方は、作画の上にも鈍重で所謂新しい写真と云うものには興味がうすいやうですね。私などはいろいろ手を入れた写真は正道をゆくものではないような気がします」（戸井）といった保守的な意見で座が閉じられている。昭和一〇年代の東北において、アマチュアで終わった多くの写真愛好者たちに共通する心情であったのだろう。この東北地方特集には、座談会出席の椎名と岩淵の作品の他に、仙台の松本敬助、古川の太友正名の作品が掲載されている。土の匂いを感じさせる叙情的な農村風景と雪景色【図3-15】は、昭和戦前期の東北のアマチュア写真の典型であり、新聞社が歳時記として求めているイメージでもあったと想像される。

ところで出席者の星は、郡山市生まれで、東北帝大医学部を卒業して同大に勤務し、後に岩手医科大

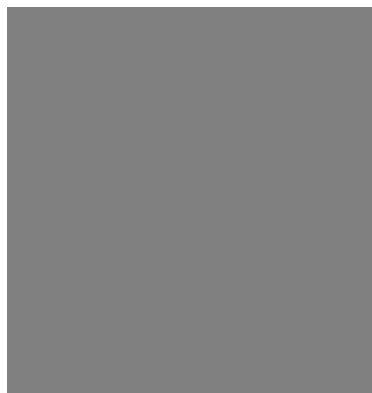


図5 大友正名《冬景》  
『アサヒカメラ』  
1938年2月号



図3 椎名長吉《農婦の生命》  
『芸術写真 作品と作法』  
(アサヒカメラ編集、  
朝日新聞社、1937年)



図4 岩淵友義《はなし》  
『アサヒカメラ』1938年2月号

学教授となった眼科医の今泉龜撤（一九〇七―二〇〇九）である。後年、今泉家の養子となり姓を改めた。美術コレクターとしても知られ、二〇一八年に郡山市美術館が特別展としてコレクションの全貌を紹介している。この展覧会を担当した同館の菅野洋人学芸員によれば、今泉は、中学、旧制高校時代から写真に熱中し、東北帝大時代には大武写真館で写真を学んでおり、「カメラ熱は生涯冷めることはなかった」という。一九三一年から終戦まで仙台に住み、『アサヒカメラ』の座談会は東北帝大医局に在籍していた頃で、翌々年には助教教授となっている。

戦後の一九五三年、岩手医大に移ってから、大戦中に中国で撮影したネガを写真の師である花巻市の内村皓一がプリントして、個展「大陸写真展」を盛岡市松屋で開催した。この個展のパンフレットに寄稿した画家の深沢省三は「絵画的」と、写真家の唐武は「豊かな詩情」と、師匠の内村は「仙台光画会在籍時代からの老練且つ円熟した感覚」と評し、主催の岩手日報社は「芸術写真」と紹介している。単なる風物写真の展示ではなく、創造的な写真作品展だったことがうかがえる。内村が記す「仙台光画会」の詳細は不明である。

田中文二郎とともに仙台写真同好会の代表に名を連ねる半沢正二郎は、今泉の先輩にあたる仙台医学専門学校（現東北大学医学部）卒の眼科医半沢正二郎（一八九三―一九八三）と思われる。魯迅研究者として知られ、後年は仙台市中央公民館長もつとめている。

一九三五年に全日本学生写真連盟が結成されており、仙台にあった旧制二三高の『明善寮報』を辿ると三二年頃には写真部が設立され、その後も絶えることなく存続していたことがわかる。高校時代からコンテストに応募していた今泉龜撤のように学生たちもカメラを所有し、単なる記録にとどまらない創作

活動を展開していたようだ。学都仙台における学生写真もアマチュア写真グループの活動につながっていただろう。

大正末から昭和初期に宮城県内最多の会員数だった石巻写真倶楽部の代表は、味噌商を営む毛利理惣治の次男で、後年理惣治を襲名した総一郎（一八九六—一九六五）であろう。総一郎は一九一四年に野球チームをつくり、三一年には私財を投じて日和球場（現石巻野球場）を建設した石巻野球の父として知られる。未だ石巻写真倶楽部に関する資料の発見には至っていない。

明治末から里浜貝塚の発掘研究に着手し、生涯にわたって考古、歴史、民俗資料を収集した毛利総七郎（一八八八—一九七五）を総一郎と記す文献もあるが、現在石巻市教育委員会が管理する総七郎が遺した毛利コレクションにも写真やカメラに関係する資料は見当たらない。毛利総一郎と石巻のアマチュア写真グループの調査も懸案である。

### 3 鈴木啓と気仙沼の「趣光会」

気仙沼の鈴木啓（一八九二—一九五〇）は、一九五三年に復刊した『芸術写真研究』の後継誌『光大』主幹の桜井栄二氏と萩谷剛氏によってオリジナルプリントが確認され、再評価された写真家である。二〇一四年にGALLERY COSMOS（東京都目黒区）で「PICTRIALIST 鈴木啓写真画」展が開催され、同名の作品集が刊行された。また翌一五年にはプロラボの写真弘社がカレンダー「2016 ACCOLLECTION OF PHOTOGRAPHS 鈴木啓」を企画、頒布し、写真史に関心をもつ人々が改めてその作品群を知った。

鈴木啓は登米町生まれで、旧姓は渡邊。一九一九年に結婚して気仙沼の鈴木金物店の養子となった頃から写真に興味をもち、二二年三月に同地で結成されたアマチュア写真グループ趣光会の結成に参加している。

趣光会の会長は、結成の翌月に第六代気仙沼町長となる新沼綱五郎。一九二五年の時点での会員は二〇名で、鈴木のほか、畠山五郎、梁川常三郎、三上善之助、猪狩兼治、猪狩勝治、瀨田茂七らの名が主要メンバーとして記録に残っている。因みに、梁川は南町で割烹古川家を経営、三上は八日町に眼科を開業していた医師である。

『アルス写真年鑑 一九二六年版』には、千葉仙、田中文二郎、針生権六の仙台勢三名の作品が選抜されているが、同年鑑の翌号となる一九二八年版には、仙台勢の掲載はなく、鈴木の《冬景色》、畠山の《晚秋夕陽》、梁川の《青根温泉》と三名の趣光会会員の作品が選ばれており、グループのレベルの高さがうかがえる。同年鑑の記録によると、一九二六年一月九日から五日間、趣光会第二回展を町内で開催して会員作品五五点を展示し、翌二七年は二月七日から三日間、町内の丸井呉服店で作品展を開催している。他に宮城県内グループの記録は掲載されておらず、趣光会の活動が目立っている。

尤も気仙沼の鈴木啓や畠山五郎は、アルス刊行の『カメラ』誌の常連投稿者であり、編集人でも選者であった中嶋謙吉から指導、助言を受けるなどの繋がりを持っていたので、年鑑の編集部（中嶋）も趣光会には注目していたと想像される。一九二八年に中嶋がアルスから独立して光大社を設立し、関東大震災後に『カメラ』誌に吸収合併されてしまった『芸術写真研究』を一九二九年に復刊すると、趣光会の全員が誌友になったという<sup>10</sup>。この頃から、『芸術写真研究』が一九四一年に戦時の雑誌統合が行われ

て終刊となるまで、鈴木は写真だけでなく自作の技法解説や近況を綴った文章も同誌に投稿している。一九二八年の第三回日本写真美術展覧会(大阪毎日新聞社・東京日日新聞社主催)で、鈴木啓の《里の春》【図6】が、芸術写真の部第三科・推薦、文部大臣賞を受賞する。荒木英夫著『気仙沼文化史年表』(著者発行、二〇〇三年)には、一九二九年の事項として「全国芸術写真展で鈴木啓《田家の朝》が大臣賞受賞」「(大気新聞)一月四日付」と記載されているが、同一の受賞歴と思われる。

鈴木は一九五〇年に死去し、翌年気仙沼市内で遺作展が開かれた。歿後、地元でも戦前に芸術写真展で大臣賞を受賞したアマチュア写真家鈴木啓の記憶はしだいに薄れていったようだ。しかし、一九九四年に桜井、萩谷両氏の調査によって遺作が確認され、近年のピクトリアリズム写真の研究の広がりの中で、今日の再評価に至っていることは本章の初めに述べたとおりである。

鈴木作品は、ソフトフォーカス傾向のレンズで撮影した原版をもとに、暗室操作で部分の高倍率引伸しや印画紙をま



図6 鈴木啓《里の春》  
『芸術写真研究』1929年4月号



るめて粗い粒子の歪んだ印画を作成し、さらに顔料で着色して仕上げる絵画的で巧芸的な写真である【図7-9】。身近な気仙沼の港や近郊の農村を被写体にして、郷愁を誘う夢幻的な情景の写真画像を長年に渡って追い求めているが、印画技術への深い関心がかがえる作品群だ。

鈴木啓と趣光会の活動は、昭和戦前期に集中している。前記した写真弘社のカレンダーの解説の中で、萩谷剛氏は「昭和初期の気仙沼はまさに転換期を迎えていた。（中略）一九二九年には大船渡線が開通し、一挙に街は活気付き、人の往来も変化してきた。鈴木啓はそれを敏感に感じ新規（ママ）な事物とそれに伴う人々を多く作品にしている。しかしそのような中、自身自身の記憶にある、変わらない気仙沼の農村の家々や人の営みにカメラを向けるようになる」と時代背景に言及している。鈴木たちが芸術写真に熱中した昭和戦前期の気仙沼の文化状況に触れておこう。

新興の芸術運動として特筆されるのが、一九三〇年三月に結成され、戦後の一九五一年に解散した気仙沼自由芸術協会である。創立メンバーは、文人で「大気新聞」の記者をつとめ、後



図8 鈴木啓《気仙沼海岸》  
1930年



図7 鈴木啓《雪の村》  
【芸術写真研究】1929年5月号

年に気仙沼図書館の館長となる菅野青顔、画家で画塾を主宰した広野重雄などで、文学、美術、音楽、演劇などの創作表現に携わっていたり関心を抱く会員三〇名が集まった。一九三四年と四一年の二度、ダダイスト辻潤を例会に招き、辻の歿後は、菅野が勤務する図書館で遺墨展を開催するなど辻に心酔し、「何ものにも捉われない」「全き自由（＝アンデパンダン）」な芸術表現を志向する人々の集まりだった。戦後まで続いた気仙沼自由芸術協会は、辻潤と親交のあった読売新聞副主筆の松尾邦之助らが結成した自由クラブに合流したのち、一九五一年に解散している。

自由芸術協会の周辺には、一九二五年創立のぼろじん、一九三〇年創立のうんぬん社、一九三四年創立のあるむ会、一九三六年に復活した行人社（創立は一九一四年）などのグループがあり、それぞれに『BOROZIN』『うんぬん』『FALM』『行人』という同人誌を発行していた。一九五三年刊行の『気仙沼町誌』

第二章文化の頁（執筆は菅野青顔か）によれば、このうち『BOROZIN』は「安寧秩序を害すとして罰金刑を受け」廃刊になったというから、表現の過激さがうかがえよう。

一九三六年復刊の『行人』について、前掲『気仙沼町誌』には、「一冊ごとカット代りに違った種々な芸術写真を貼り付けるといふ凝ったもの（中略）印刷がお手のものだけに高踏的な編集ぶり」という記述がある。残念ながら芸術写真が貼付された『行人』は未だ確認できていない。菅野青顔や百姓画家



図9 鈴木啓《ミス八瀬》1936年

を名乗った小山武雄、田園歌人熊谷武雄らが参加していた行人社の同人の中に、趣光会の会員は見出せない。行人社の設立会員の広野貞助（太兵衛）が、一九二二年に自家現像で活動写真を制作するほど写真に詳しくあったという証言<sup>11</sup>から、広野が関係していたのではと推察される。長尺シネフィルムを自家現像するほどの技術を持っていた広野貞助は、映画館や運輸会社を経営する実業家であり、同人誌の印刷を行い、グループの事務所ともなっていた麻屋印刷所も広野家が経営していたようである。

一九三〇年の気仙沼の人口は、おおよそ三万五千人。結成時期が八年違うものの趣光会と自由芸術協会は活動した時代と場を共有している。「ベス単フード外し」「雑巾がけ」という業界用語に象徴されるような、定型化、様式化と見做されかねない技巧を使って農村を被写体にした絵画的風景写真を創作していた人々と、ダダイズム、アナキズムといった前衛思想に惹かれた人々の接点に興味がわく。

#### 4 櫻井一郎と阿部徹雄―宮城県出身の職業写真家

大正から昭和前期に活躍した宮城県ゆかりの職業写真家のひとりとして、櫻井一郎（一八九三―一九二八）の名があげられる。櫻井の写真は、二〇一七年に名古屋市美術館が企画した「異郷のモダンズ―満洲写真全史」展で紹介され、翌年、宮城県内の大崎市にある吉野作造記念館においても「写真展 櫻井一郎が見た満洲」として展示された。以下に述べる櫻井の経歴と業績は、名古屋市美の「異郷のモダンズ」展図録掲載の竹葉丈氏の論文<sup>12</sup>に拠っている。

多賀城に生まれた櫻井は、仙台の私塾に通っていた頃に趣味で写真をはじめた。遠洋漁業で財をなした伯父の支援を受けて、一九一五年、二二歳のときに、当時実質的に日本の支配下となっていた中国の

大連に渡って大陸の風物に接する。一旦帰国後、一九二二年に再度大連に赴き、中国北東部とモンゴルなど満蒙と呼ばれていた地域の自然風景、遺跡、歴史的建造物、民衆の風俗などの写真撮影に着手した。

櫻井の写真取材の背景にあるのは、南満州鉄道株式会社（満鉄）の内地向け広報・宣伝活動だった。宣材写真の提供で満鉄と関係を築いた櫻井は、満蒙の風物を紹介する写真集の企画を発案して一九三三年、大連に満蒙印画協会を設立し、会員を募って翌年から月刊写真集『満蒙印画輯』を限定頒布する事業を開始している。キャビネ判印画（オリジナルプリント）一〇枚と解説箋を両面に貼付した台紙五枚を一セットとして、毎月一回、会員向けに配布し、一年後に送られてくる表紙、裏表紙に綴じ込むと写真集が完結するという分冊販売システムだった。創業一年半で七千人の会員を集め、三千部が内地の中等以上の学校に贈られたという。

満蒙印画協会は一九二六年に亜東印画協会と改称し、写真集も『亜東印画輯』と改題した。一九二八年の取材は、辺境の紛争地帯に入るもので、厳しい撮影行から大連に帰還してのち、同年一月に櫻井は病死する。しかし櫻井の死後も協会は存続し、印画輯は一九四四年まで刊行され続けた。竹葉丈氏は「櫻井一郎が撮影した写真によって、満洲がはじめて『視覚化』され、配信された」<sup>13</sup>と総括している。写真集とともに配布された会員向け機関誌『足跡』『亜東』には、専門家による本格的な論考も掲載し、さらに一九二七年に同協会は『支那研究論叢第一輯』を出版するなど、「満洲に関する最新の情報と「知」を形成」<sup>14</sup>した業績も見逃せない。

『亜東印画輯』は、財団法人東洋文庫所蔵本の全ページと京都大学人文研図書室の所蔵本の一部がデジタル化され、現在、東洋文庫現代中国研究資料室のサイト (<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib3/>) で公

開されている。写真集の全容を見ることができるのは嬉しいが、著作権が消滅しているとはいえ、サイト内に櫻井一郎に関する紹介が無いのは残念である。

二〇一八年一二月の山形大学でのシンポジウムの後、手許にある宮城県写真史に関連する資料ファイルを整理していたところ、「郷土の名写真家後世に・多賀城／中国の風俗、自然五一〇枚／作品集出版に奔走／山大教授莊司さんら」という見出しの『河北新報』（一九八四年八月二三日付）の記事のコピーが出てきた。多賀城市と塩竈市に住む櫻井の縁者が所蔵する写真を、櫻井の業績を調べていた当時山形大学人文学部教授（中国文学）で仙台市在住の莊司格一氏が見出し、「写真集を出版するなどして、郷土の偉人を顕彰したい」と奔走している、という内容である。莊司教授はその後奥羽大学の学長に就任。作品集の出版には至らなかったが、山形大学の関係者が櫻井一郎の評価の端緒を開いたことを追記しておく。

もうひとり、櫻井とは二〇歳ほど年齢が離れるが、戦前から毎日新聞社の写真部員として活躍した阿部徹雄（一九一四―二〇〇七）の名をあげておきたい。満鉄職員だった父の赴任先の朝鮮で生まれた阿部は、父母の実家がある登米町で幼少期を過ごし、仙台第二中学校（現仙台二高）に進学した。

一九三六年に東京高等工芸学校（現千葉大学工学部）印刷工芸科を卒業し、同年東京日日新聞（現毎日新聞社）に入社する。三九年から三年間、中国広東支局勤務となって中国戦線を取材し、従軍写真を『寫眞文化』誌等にも発表した。その後、四四年には海軍報道班員として南方の最前線を取材するなど、戦時中は戦地報道の第一線に立っていた。

戦後は毎日新聞傘下の「サン写真新聞」の写真部長をつとめ、一九五四年に創刊する『カメラ毎日』の編集部にも準備期から在籍した。その後、写真記者として一九七〇年代まで世界各国をめぐり、世界の現場や著名な人物たち、自然や文化遺産を取材している。

阿部のしごとで注目されるのは、ヨーロッパの近代美術の巨匠たちを訪ねて撮った写真である。広東支局時代に、作戦記録画の取材で訪れた藤田嗣治、山口蓬春の案内役を二週間ほどつとめることがあり、特に藤田には親しく接してもらったという。この出会いから約一〇年が経過した一九五二年に、阿部は、新聞社に在籍したまま、渡航費用を自己負担してパリの藤田を訪ね、ローマにも足をのぼす。藤田のほかには、滞欧中の堂本印象、長谷川路可、青山義雄らの画家に会い、青山の仲介でアンリ・マティスに、仏文学者小松清の仲介でモーリス・ヴラマンクに、そして作家で芸術批評家のアンドレ・マルローにもインタビュースし、その素顔をカメラに収めた。注目されるのは、一九四九年に発売されたばかりの国産の富士カラーフィルムを使っていたことである。このときのレポートは『毎日グラフ』『みづゑ』『美術手帖』などの雑誌に掲載され、のちに二都市の風景や美術館などの写真も加えて『パリ・ローマ欧州カメラ紀行』（毎日新聞社、一九五四年／題字Ⅱ里見勝三）、『藝術の都欧州カメラ紀行』（新潮社、一九五六年／装丁Ⅱ東山魁夷）として出版された。製版・印刷史にも特筆される豪華写真集である。

一九五七年から五八年にかけて再び渡欧し、当時の彫刻界に新風を吹き込んでいたイタリアの彫刻家たちを中心に、ヨーロッパの画家や彫刻家、写真家、滞欧中の日本人画家を取材して『現代の造形ヨーロッパの芸術家たち』（毎日新聞社、一九五九年）を上梓した。同書に収録されている作家は、マリノ・マリーニ、荻須高德、ペリクレ・ファッツィーニ、ジャコモ・マンズー、ロベール・ドアノー、浜口陽三、

ジャン・カルズー、オシップ・ザツキン、エミリオ・グレコ、エドゥアール・ブーバ、堂本尚郎、土橋醇、オットー・シュタイナート、ピエール・スラージュ、アントニ・クラールベ（掲載順）という錚々たる顔ぶれである。人脈と取材交渉に制約もあつただろうが、R・ドアン、E・ブーバ、O・シュタイナートという写真家のとりあわせに、阿部の写真観がうかがえるのではなからうか。

このほかにも、花巻に疎開していた高村光太郎や一九五〇年代に来日したイサム・ノグチなどの姿も撮影している。近年、ここに掲げた作家たちの作品を紹介する展覧会の会場やその図録で阿部の写真を目にするようになった。また「ジャーナリスト・阿部徹雄が撮った浜口陽三・一九五八パリ」（ミューゼ浜口陽三・ヤマサコレクシオン、二〇一一年）といった企画展示も行われている。写された作家たちの研究資料としての価値も高い写真である。阿部は日本のアート・ドキュメンタリー・フォトの先駆者であつたといえよう。

一九五二年の渡欧取材の成果は、歿後、子息の阿部力氏の編集により『1952年のマティス、ヴラマンクそしてフジタ』(Matisse, Vlaminck and Foujita in 1952) (阿部徹雄著、阿部力編集・発行、二〇一四年)として出版されている。同書に収録されているニースで撮られたマチスの写真の中に、日本からお土産に持参した風鈴が写っているカット【図10】があるのだが、この鑄鉄製の風鈴は、阿部が幼少期を過ごした登米町の伝統工芸品「松笠風鈴」である。私事ながら筆者も現登米市の生まれ



図 10 阿部徹雄  
《日本から持参したお土産の  
砂鉄製の風鈴を眺めるマティス》  
1952年（オリジナルはカラー）

であり、近代絵画の巨匠マティスと登米町との出会いに驚かされ、感動を覚えた。

一九四三年の正月に、阿部が帰省した折に撮った登米町と仙台市の写真が遺されている。現在重要文化財に指定されている旧登米小学校（当時は国民学校）の校門に掲げられた国旗と「皇紀二千六百三年を迎え（中略）さあ二年目も勝ち抜くぞ」とチヨークで書かれた黒板を撮った写真【図11】は、まさにフォト・ジャーナリストの視線である。また校庭で無邪気に遊ぶ子どもたちの姿【図12】や、生活感が漂う町内、市内の風景のスナップ・ショット【図13】には、故郷を見つめる暖かな眼差しとともに、構図や光の扱い、シャッターチャンス



図 12 阿部徹雄  
《宮城県登米町国民学校の校庭で遊ぶ子どもたち》1943年



図 13 阿部徹雄  
《仙台市内の銭湯》1943年



図 11 阿部徹雄  
《宮城県登米町国民学校の正門と掲示板》1943年



など、プロフェッショナルの熟達した技術がうかがえる。この登米や仙台など東北地方の写真も含めて、戦前、戦中に従軍記者として撮影した写真から一九七〇年代の海外取材まで、阿部が撮った膨大な写真は、毎日新聞社が運営するデータベース「毎日フォトバンク」(<https://photobank.mainichi.co.jp>)内の「阿部徹雄コレクション」で見られるようになった。二〇二〇年九月現在一・一五四点が公開されている。

宮城県を離れて活躍し、故郷とも疎遠になったために、地元でその業績を知る人も少ないふたりの写真家を紹介した。櫻井一郎、阿部徹雄のほかにも大正から昭和の時代に優れたしごとを残した宮城県ゆかりの写真家がいるかもしれない。

## おわりに

明治末年に宮城県で生まれた宮城輝夫（一九二二—二〇〇二）と佐藤忠良（一九二二—二〇一一）、ふたりの美術家と写真との関わりについてのメモを記しておこう。

白石で生まれた宮城輝夫は白石中学を卒業後、画家をめざして一九二九年に上京し、川口軌外に師事した。シュルレアリスムの影響を受けて、三七年に新造型美術協会に参加している。戦時中に白石に戻り、一九五三年に仙台でグループ「エスプリ・ヌヴオ」を結成し、宮城県の前衛美術運動のリーダーとなった。グループ解散後は団体に属さず、宮城高専（現仙台高専）や三島学園女子短期大学（現東北生活文化大学）の教員を務めながら、晩年までアヴァンギャルド精神を貫く創作活動を展開した。

戦前の東京時代、宮城は一九三八年に瀧口修造、永田一脩、奈良原弘らによって結成された前衛写真協会に加わっている。メンバーには、田中雅夫、濱谷浩の兄弟<sup>15</sup>をはじめとする写真家だけでなく、阿

部展也、森堯之などの画家も多数集つており、シュルレアリスムに傾倒する画家たちが写真に深い関心を寄せていたことがうかがえる。

この時期の宮城の写真作品として残っているのは一九三九年の《自画像》【図14】のみである。戦後は画家として活動しており、写真作品の発表歴はなく、歿後に宮城県丸森町に一括寄贈された遺作、遺品の中にも写真作品はない。宮城輝夫が中心になつていたエスプリ・ヌウボオの会員には、第一章で紹介した大武写真館を継いだ小関四郎や、カメラ雑誌でも活躍していたプロ写真家の小野幹らがあり、あえて専門外の写真作品に取り組もうとは思わなかつたのではないかと推察される。

しかし、全く写真をやめたわけではない。一九八〇年代以降に発表した一五〇—二〇〇号サイズの大画面ロールカンヴァス（枠に張らない）絵画は、原画を複写したスライドをプロジェクターで拡大投影して描いたもので、その過程でマクロレンズ付一眼レフカメラを用いている。同じ頃、マクロレンズの接写機能が気に入ったのか、身辺に見出した小さなオブジェや異形の植物などをクロージング・アップで撮影し、ときにはポストカード判印画紙に



図 14 宮城輝夫《自画像》  
『フォトタイムス』1939年2月号



図 15 宮城輝夫のポストカード・プリント  
(筆者宛 1986年消印・オリジナルはカラー)

プリントして葉書として使っていた【図15】<sup>16</sup>。

生前に前衛写真協会の話をする機会はなかったが、マン・レイの映画上映会で同席した折に「マン・レイの写真より、ヴォルスの写真がいいね」と語っていたのを記憶している。シュルレアリストとして名を残す宮城輝夫が、戦前に前衛写真グループに加わって瀧口修造や濱谷浩らと交流していたことは見逃せない。

意外かもしれないが、彫刻家の佐藤忠良が実験的写真表現を試みた作例がある。佐藤は、大和町で生まれ、東京美術学校卒業後に新制作協会の彫刻部創立に参加し、戦後日本の具象彫刻の第一人者となった。ロングセラー絵本『おおきなかぶ』（福音館書店、初版一九六五年）の画家としても知られ、宮城県美術館に記念館が併設されている。

衆機種として人気を博した二眼レフカメラ・リコーフレックスの撮影技法書として刊行された渡辺俊雄著『RICOH FLEXの前進』（十字文庫2、東京十字社、一九五四年）という冊子。表紙と、光画法という項目に、佐藤忠良のライト・ドローイングが見本作例として紹介されている【図16―18】。長時間露光中にペン



図 16 表紙



図 18



図 17

『RICOH FLEX の前進』

佐藤忠良+渡辺俊雄によるライト・ドローイング 1954年

ライトの光跡で線画を描く写真は、ピカソとジョン・ミリのコラボレーションをはじめとして、多くのアーティストが試みてきた二〇世紀半ばに広がった美術的な写真表現である。佐藤の記憶によると、同書が出版された頃に、近所に住んでいた渡辺氏の依頼で撮影に協力したもので、もちろんピカソの写真を手本にしたとのことだった。

佐藤は彫刻による人間像の制作をメインとしながら、数多くのメダルやアクセサリをデザインし、絵本や挿絵、装幀も手がけるマルチメディア・アーティストでもあった。この冊子が発行された一九五四年当時、佐藤は桑沢デザイン研究所の創立に関わり、佐藤の周りの講師陣にはデザイナーの亀倉雄策とその親友の写真家土門拳や、石元泰博もいた<sup>18</sup>。ファッション・ジャーナリストの桑沢洋子が創立したこの研究所は、日本のバウハウスをめざした教育機関で、佐藤も同時代の建築やデザイン、そして写真表現にも関心を寄せていた。このライト・ドローイングは、自発的な表現ではないにしても、創作活動の足跡として記録しておきたい画像である。

ここに紹介した宮城輝夫のセルフ・ポートレートと佐藤忠良のライト・ドローイングは、制作の動機や、作品としての文脈、属性も異にするものだ。しかし、同じ時代に美術の道を志し、それぞれに絵画と彫刻という表現を追求する過程で、写真というメディア、カメラという道具に出会い、その表現特性に関心を惹かれた証であることは疑いない。

ところで宮城も佐藤も、カメラ、レンズの後ろ側ではなく、前側にいることに気づかれただろうか。写す写真ではなく、撮られる写真であり、つくる写真である。ふたりの写真表現は、たまたま「宮城県の美術家」＋「昭和」＋「写真」という検索ワードを設定することで並んだものだが、対比することで

写真という表現媒体の本質的な構造が見えてくる。

本稿の冒頭で、写真に対して芸術表現としての正当な評価がなされてこなかったことと、それに伴う写真作品の亡失に触れた。しかし、大正から昭和の時代は、プロやアマチュアの作品以上に、私的な家族写真から公的アルバムまで、記録、記念、思い出としての写真―それもプリント―が膨大に残された時代でもある。作品としての写真のみを対象とする狭義の写真史（＝写真表現史）という視点も重要だが、シンポジウムのタイトルに掲げられた「写真文化」という枠組みに対して、どのような検索ワードを設定して、残された写真を読み解いていくのかが今後の地域写真史研究の課題なのだろう。

アマチュア写真家やアマチュア写真グループを知るには、連絡先や集会場所となっていた写真材料店カメラ店の調査が糸口となるのだが、量販店の進出とデジタル化によって急速に廃業する店舗が増え、手遅れになりつつある。地域写真史研究の基礎となる「写真材料商史」や「写真機店史」といった商業史のデータ収集も急がれるのではなからうか。

- 1 一八七八年に開業したという説もある。『仙臺新聞』一八七八年三月二十九日付掲載の遠藤写真館の広告が「移転開業」であることから七六年説をとった。
- 2 西村勇晴「宮城県最初の写真家遠藤陸郎」『いきいきライフ』一七、宮城いきいき財団、一九九五年七月
- 3 伊藤民夫「仙台映画館変遷史」集団MESSA編集『仙台映画大全集』プレスアート、一九八二年
- 4 伊達宗弘氏によれば、中国に留学し、帰国後は皇族の通訳を務めた伊達寧裕（一八六七―一九四五）も写真を趣味とし、遺品の中に写真やコンテストの受賞牌などがあるという。
- 5 逸見英夫『仙台はじめて物語』創童社、一九九五年
- 6 堀宣雄「表現者・小関庄太郎―戦前期の作風展開―」『光のノスタルジア 小関庄太郎と日本の芸術写真』展図録、福島県立美術館、二〇〇一年
- 7 菅野洋人「今泉コレクションについて」『眼の人今泉亀撤のコレクション』展図録、郡山市美術館、二〇一八年。菅野氏には一九五三年の「大陸写真展」の資料を提供いただき、今泉と写真について諸々ご教示いただいた。
- 8 眼科医の半沢正二郎が写真に関わっていたという確かな資料や証言に出会っていないので、同姓同名の別人の可能性もある。
- 9 『PICTURALIST 鈴木啓画集』編集・制作・発行者〓萩谷剛、発行所〓株式会社コスモインターナショナル、二〇一四年
- 10 萩谷剛「鈴木啓・略歴と作品」、カレンダー「2016 A COLLECTION OF PHOTOGRAPHS 鈴木啓」写真弘社、二〇一五年
- 11 広野武蔵「恵比寿館制作活動写真（気仙沼港・実況）」『げせんぬま写真帖』気仙沼商工会議所、一九七七年

12 竹葉丈「大陸の風貌―櫻井一郎と〈垂東印画協会〉」『異郷のモダニズム 満洲写真全史』国書刊行会、

二〇一七年

13 前掲註12書

14 前掲註12書

15 本論とは直接関わらないが、濱谷浩の弟濱谷了一の著書『双忘記』（発行〓濱谷浩、湘南文庫、一九八九年）によれば、濱谷兄弟の父は宮城県北上町十三浜（現石巻市）の出身だという。

16 宮城輝夫の写真、カメラについて、子息の宮城安総氏に多くをご教示いただいた。

17 一九二〇年京城生まれ。商社、石油会社勤務を経て、一九五三年に『RICOH FLEXの前進』、翌年『RICOH FLEXの完成』を出版。その後アジアの神仏像や日本の海岸を撮影した作品を発表。横浜で写真店を営む。

18 フランス国立ロタン美術館（パリ）での佐藤の個展を記念して刊行された作品集『佐藤忠良 The Sculpture of Churyo Sato』（現代彫刻センター、一九八二年）は、亀倉の造本デザインで、石元が撮影を担当した。